

## 安定感に満ちた学級集団の育成

今井雄介\*

この研究は、情緒不安定な生徒が過半数を占める学級集団に対し、小集団編成のくふう特に、同一性格の者を配慮し、かつ相互理解を深めさせるためにグループカウンセリングを実施し、安定感に満ちた学級集団への変容をめざしたものである。その結果、わずかではあるが、人間関係が改善され、安定感も醸成されつつあることを、生徒は認知している。

### はじめに

生徒は学校生活の大部分を、学級集団に所属しながら学習活動を展開している。学習の成否の一つには、学級成員の人間関係が信頼によって結ばれ、自主的に決定した行動規範をもち、ともに向上しようとする意欲の有無にかかっていることはいうまでもない。ところが、成員相互に連帯意識が乏しく、衝動的言動により無法化し、質の高い意欲的な学習や生活を送ろうとしない学級集団を担任した場合、担任としてどうすべきか大きな課題となる。教師に反抗する態度を示すわけではないが、いつも周囲が気になり、情緒不安定な様相を示し、その結果、価値あるものを尊ぶふんい気が醸成されず、学習能率をあげ得ないものにする。もちろん、教師の指導観・指導法あるいは生徒との人間関係が大きく作用していることは当然である。そのことを念頭におきながら、合わせて、生徒個々のパーソナリティや成員相互の人間関係を明らかにし、成員相互の集団的エネルギーを利用することが必要であると考えた。そして、自己理解を深めさせ、集団の中で安定した生活を送らせたいという願いをこめて、この研究を進めることにした。

### I 研究の目的

衝動的で自己統御のできない学級集団の原因を追求し、グループ編成のくふうとグループカウンセリングや個別相談をとおし、成員相互の関係を改善し、安定感に満ちた学級集団の育成をはかる。

### II 研究の方法と経過

#### 1 対象学級

2年〇組(男子22名、女子20名)。2年になるとき編成替えにより新編成された学級である。男子MY男、女子TK子を除いて問題にすべき者なしとの申し送りであった。

\* 中蒲原郡小須戸町立小須戸中学校教諭

2 研究の方法

- (1) YG性格検査，マルチの実施により，生徒個々の理解とともに学級の実態を知る。
- (2) ソシオメトリック・マトリックスによるグループ編成とグループカウンセリングを行なう。
- (3) 個別相談の機会を多くもつ。
- (4) 学級に対する生徒の意識の変化を調べる。

3 学級の実態

(1) 知能検査と学力検査（46・5実施）

（表1）知能検査と学力（国語）検査

国語	知能	34以下	35～44	45～54	55～64	65以上	計
34以下		1	0	0	0	0	1
35～44		4	5	2	0	0	11
45～54		1	7	10	2	0	20
55～64		0	1	4	2	0	7
65以上		0	0	1	2	0	3
計		6	13	17	6	0	42

教研式学年別知能検査によると，偏差値最高64，最低28，学級平均47.5である。偏差値34以下の者が学年（5クラス）14名のうち約半数の6名が集まっている。

学力の面では，最高70，最低30，学級平均48.5

で，知能に比しやや高い結果を得ている。

(2) Y-G性格検査（46・5実施）

（表2）Y-G性格検査

	A類		B類		C類		D類			E類			計
	A'	A''	B	B'	AB	AC	D	D'	AD	E	E'	AE	計
男	1	1	4	4	1	1	0	1	2	3	3	1	22
女	2	1	2	7	1	1	0	0	2	1	2	1	20
計	5		19		2		5			11			42

A類（平均型）11.9%，B類（不安定不適応外向型）45.2%，E類（不安定不適応内向型）23.8%である。

（表3）Y-G検査にみられる特性

	5	4	3	2	1	計
CO	6	18	10	6	2	42
AG	6	19	9	6	2	42
G	0	5	19	14	4	42
R	8	18	14	2	0	42
A	1	10	16	13	2	42

反社会的行動に出やすいもの（B，B'）17人，ノイローゼ傾向の強いもの（E，E'）9名，計26名（61.9%）と過半数を占めている。それに比し，理想的な人格の持ち主といわれるD類はわずか5名しかいない。

12の性格特性のうち，左表の項目を分析してみる。CO（非協調性），AG（愛想が悪い，攻撃性），R（衝動性）が多く，G（活動性）A（支配性，リーダーシップのある者）が少ない。このことから，仕事やいろい

ろな活動に節度をもってあたる傾向が乏しく、常に自己中心的、非協力的な態度で、集団活動に不適応反応を示すことが内在しているように思える。

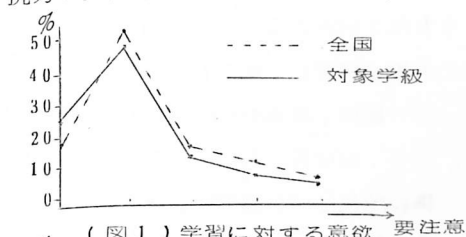
### (3) マルチ検査にみられる傾向

(表4) マルチ ノイローゼ (要注意者%)

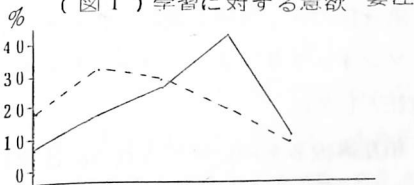
ノイローゼ傾向は、生徒が自己違和感、不安感、自己否定感をもち心の中で悩んでいる状態で、Y-G検査のE類と比べるとやや少ない数字となっている。

学校生活をまじめにしようという意志は全員にあるが、実際まじめにできない生徒は33%いる。項目4は、派手で見栄坊、付和雷同するタイプでめだっている。家庭不適応感に比し、特にクラス不適応感を持つ生徒が著しく多く生徒の半数を占めている。クラス不適応感とは、自分が理解されていないという心理からくるもので、級内の人間関係の改善が必要となる。教師不適応感をもつ者の少ないこと、問題に対する抵抗力の要注意者の少ない実態から、指導にあたって効果が期待できそうである。

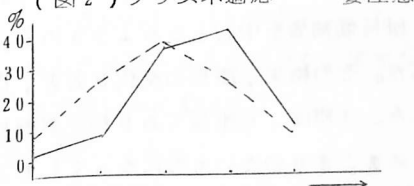
項 目	%	全 国
1 ノイローゼ傾向(NS)	17	16
2 非行化傾向 (DS)	*24	16
3 学校生活不まじめ	*33	17
4 派手で主体性がない	*38	17
5 攻撃の傾向	*23	13
6 家庭不適応感	19	19
7 学校不適応感	*29	18
8 クラス不適応感	*51	26
9 教師不適応感	17	22
10 問題に対する抵抗力	27	31



(図1) 学習に対する意欲 要注意



(図2) クラス不適応 要注意



(図3) 学習態度(学校) 要注意

(表5) マルチ 学習 (要注意者%)

項 目	%	全 国
1 学習不足の傾向	14	20
2 成績に対する関心	4	7
3 学習に対する意欲	10	16
4 学習に対する自信	10	18
5 学習態度(学校)	*53	30
6 学習態度(家庭)	21	23
7 家庭における期待	15	12

○学習不足の傾向が全国に比べ少ないことは、先の表1によって明らかである。

○学習に対する意欲や関心に要注意者が少ないことは表5および図1により明らかであるが、クラス不適応感すなわち成員が互いに理解し合うふんい気に欠けているために、学習に打ち込む意欲がありながら、学習態度が悪くなるのではないかと考えられる。これは、主体性がない(表4)ことと、Bタイプの多い(表2)ことからうかがえるし、リーダーとなる者が少ないことにも原因していると考えられる。

## 4 指導の経過と考察

### (1) グループ編成の試み

4月中旬第1回編成。前述調査以前であり、生徒の意志を尊重し実施する。男女混成、班長はクラス全員で選出し、担任を交えた班長会議で班員を決定した。その結果、協力して学習したり作業し合うというより、遊び中心の傾向が強く、授業のふんい気をこわす者がどの班にもみられるようになった。

6月中旬、生徒の中から再編成の要望があり、前回の反省のうえにたち、落ち着いた学級、協力し合う班をめざして再編成を行なう。方法は、生徒の要望もあり前回と同じにした。

(表6) 第2回グループ編成 (各班の上は長, 下は副)  
\*印は生徒の評価順位

班	班長	性格	知能	ISSS	成員性格	選択数, 排斥数	*
1	男	D	4	0.50	A <sub>3</sub> B <sub>1</sub>	4 (0) 5 (2)	1
	女	B	3	0.34	D <sub>1</sub> E <sub>2</sub>	( )内は相互	
2	男	B	4	0.20	C <sub>1</sub> B <sub>5</sub>	4 (3) 4 (2)	4
	女	B	3	0.47	E <sub>1</sub>		
3	男	E	3	0.12	D <sub>1</sub> B <sub>1</sub>	7 (5) 2 (1)	2
	女	D	2	0.34	C <sub>1</sub> E <sub>4</sub>		
4	男	B	4	0.20	E <sub>3</sub> B <sub>4</sub>	5 (2) 4 (3)	6
	女	B	3	0.59			
5	男	B	3	0.40	A <sub>1</sub> B <sub>5</sub>	6 (4) 5 (3)	5
	女	B	3	0.51	D <sub>1</sub>		
6	男	D	4	0.13	A <sub>1</sub> B <sub>4</sub>	7 (5) 6 (2)	3
	女	B	4	0.47	D <sub>2</sub>		

その結果、班長には成績上位の者で活気のある者が選ばれBタイプが圧倒的となった。班によって協力、非協力の差が大きくなり、4班にあっては陰にこもったふんい気を帯びる傾向となる。この原因としては、騒がしくする生徒を分離し、「静かにする」を意識し過ぎたことと、班長、副班長の性格が同一のタイプであるか、班内にBタイプの占める割合の多いことに起因するのではないかと考えられる。(表6)は、班編成後、7月に作成したものである。

(表7) 第3回グループ編成 (\* ( ) は得票)

班	班長	性格	知能	ISSS	成員性格	選択数, 排斥数	*
1	○男	B	4	0.20	A <sub>1</sub> B <sub>3</sub>	7 1	1
	男	C	3	0.21	C <sub>1</sub> E <sub>2</sub>	(7) (0)	
2	○男	D	4	0.61	D <sub>1</sub> B <sub>3</sub>	7 1	1
	○女	B	3	0.52	E <sub>3</sub>	(2) (0)	
3	男	A	2	-0.01	A <sub>2</sub> B <sub>4</sub>	5 4	6
	○女	B	4	0.28	D <sub>1</sub>	(4) (0)	
4	男	B	4	0.21	B <sub>5</sub>	7 0	5
	○女	B	3	0.51	E <sub>2</sub>	(2) (0)	
5	○男	D	4	0.58	A <sub>1</sub> B <sub>3</sub>	8 1	3
	○女	D	2	0.11	C <sub>1</sub> D <sub>2</sub>	(8) (0)	
6	男	D	3	0.49	A <sub>1</sub> B <sub>1</sub>	7 0	4
	女	E	2	0.22	D <sub>1</sub> E <sub>4</sub>	(4) (0)	

9月第3回めの編成。生徒の要望もあり次の原則を約束して編成した。

ア. 班の編成、座席の位置は担任に一任。

イ. 班長、副班長は班内の互選とする。

ウ. 係の所属は班会議で決定する。

エ. 給食係のみ、各班1週間交代とする。

オ. ソシオメトリック・テストを利用する。

担任としては、

㊦ 相互選択者を同一班に入れる。㊦排斥者数を最少限となるようにし、相互排斥者

を同一班に入れない。㊦周辺生徒を考慮する。㊦座席の位置は、班長候補者を中心となるようきめる。㊦性格のタイプを考慮する。等を前提として表7のように決定した。その結果、班長の交代5名と、Dタイプの選出がめだち、班長、副班長の性格も異質のものとなった。3班は、元班長であり相互選択しているU男とI男を入れたが、排斥数19のY男を班長にしたためまとまりのないものになってしまった。しかし、本人は班長としての自覚をもち始めているので、随時励ますことにしている。

## (2) 個人相談とグループ相談

4月第1回定期相談； 主として、生徒と教師のレポートづくりのために行なう。

5月生活目標設定と計画の援助として個別相談を行なう。

6月グループ相談； 班内の問題点を話し合い、班内の人間関係改善を意図して行なう。

9月グループ相談； 班員相互の理解をねらいとする。

新しい班の編成を終わった9月16日，相談室

T：5班でしたね。さあかけなさい。

G<sub>1</sub>：何かある？

G<sub>2</sub>：あるみたいだけど……

G<sub>1</sub>：男子のほうなんかあるかね。

B<sub>1</sub>：なにもねえな。

G<sub>1</sub>：男子，もっと元気出すといいと思ういね。

G全：そうよ。

B全：（顔を見わせて笑う。）

B<sub>2</sub>：Kさん，きのうどうしたんでえ。

G<sub>2</sub>：きのう昼休み，屋上で見たんだけどさ，田んぼ道でポツンと立っているんよ。

T：Kさんのことが気になっているんですね。

B<sub>2</sub>：友だちがひとりもいないみたいで，見ていて気の毒になります。

T：ハア，かわいそうだと思うわけ。

G<sub>2</sub>：私もそう思います。（ほかの者もうなずく）

G<sub>3</sub>：けどさ，Kさんに遊ぼうと言っても仲間にはいないし，どうしていいかわからない。

G<sub>1</sub>：気に入らないと口の中でぶつぶつ言って，にらんたりするし，人が話をしていると，そばに来てニコニコして聞いているんてね。

B<sub>1</sub>：2年の初めのころ，男子2，3人に何か言われていたことがあるんだが，クラスの中がちょっとおかしいんじゃないかな。

G<sub>2</sub>：あした学校へ来るだろうか。来たらさ，みんなで話しかけていこうてね。

G全：うん，いい。

以下略

### (3) その他の方法

ア．ひとりひとりに生活目標をもたせ，生活にはりをもたせる指導

イ．役割演技の試み（3回）

ウ．欠席者への見舞状；3日間以上の欠席者に送る。

エ．手紙の交換；意見，激励，忠告等内容は自由。中傷や非難にならないこと，教師は見ないこと。

オ．落書き板の設置；大洋紙を背面壁に張り，自由に書かせる。

K子，典型的なEタイプ，交友関係なく，いつも孤立している。父，1年時自殺，母親ひとりで飼料店経営，K子への干渉強く，本人は反抗的になっている。9月18日，第4回の個人相談。

T：さあ，かけなさい。

K：（椅子に腰をかけ，落ち着かない目で教師をちらちら見る。）

T：最近はどうな気持ちですか。

K：（沈黙3分，ようやく落ち着いたようすで）少し落ち着いてきました。

T：落ち着いてきたと感じるんですね。

K：（うなずく……沈黙1分）おかあさん，あんまり言わなくなりました。

T：おかあさんがあんまり言わなくなった，それで落ち着けるようになって来た……

K：少し素直になったといって喜んでいる。

T：そう，よかったね。……

K：……だけど学校へ来るのはいやです。

T：学校へ来るのはいや

K：はあ，みんながわたしの顔をじろじろ見て…

T：みんなが顔を見るのでいやなわけ

K：はあ，遊んでもらわなくてもいいんです。どっか遠い……東京なんか行ってみたい。

T：東京へ

K：だけど，おかあさんは高校へ行けというし，東京へ行けばおかあさん心配するし……

T：それで困って，悩んでしまう

K：はあ……

以下略

## IV 結果とその考察

## 1 班及びクラスに対する認知の程度

表8の結果を見ると、 (表8) 班及び学級に対する認知(人数) 1015

班に対する安定感，協力性も出てきていることがわかる。クラス全体としても，まとまりがで，授業態度も向上しつつあることが明らかになった。ただ，一

項目	認知度					計
	+2	+1	0	-1	-2	
1. 今の班のほう落ち着いていられるか	6	21	10	5	0	42
2. 今の班のほうが気楽に話し合えるか	11	16	15	4	1	42
3. 今の班のほう協力性があるか	9	19	9	4	2	42
4. 勉強を教え合うようになったか	7	23	8	4	0	42
5. 清掃を熱心にするようになったか	10	17	13	1	1	42
6. 教室の整理整頓	3	15	19	4	1	42
7. 学級のまとまりはついたか	15	13	10	3	1	42
8. 学習態度(先生がおられるとき)	2	24	10	5	1	42
9. 自習時間の態度はよくなったか	3	21	17	1	0	42
10. クラスのことを考えるようになったか	1	22	14	3	1	42

のいることを忘れてはならない。一1，一2とあげた生徒は，いずれの項目についても同じように認知している点を考慮し，今後の指導にあたらねばならないと考える。

## 2 ソシオメトリック・マトリックスから

(表9) ISSSの変化

- (1) Isss の分布構造をみると，全体に好ましい方向に向上している。
- (2) 第1回目では，男子下位集団1，周辺児1，女子においては，下位集団3，周辺児2，孤立児1であったものが，第2回目では男子女子合わせた下位集団1となり，周辺児男1，女2となる。学級のまとまりが出てきていることは表8の項目7によっても明らかである。遊び中心の集団から，協力的建設的な集団に変わったことは，リーダーが単なる人気者や成績上位者であったものが，意欲的に取り組もうとする者になったことからもうかがえる。
- (3) 相互選択数第1回目98(49組)から第2回目134(67組)と増し，相互排斥数は54(27)から34(17)に減っている。

Isss	1回	2回
0.76～0.85		
0.66～0.75		
0.56～0.65	2	4
0.46～0.55	4	4
0.36～0.45	5	6
0.26～0.35	2	7
0.16～0.25	11	8
0.06～0.15	4	6
-0.05～-0.05	6	4
-0.15～-0.06	3	
-0.25～-0.16	1	2
-0.35～-0.26	2	
-0.45～-0.36		
-0.55～-0.46	1	1
-0.65～-0.56	1	
-0.75～-0.66		
成 員 計	42	42
実施時期	5月	9月

## V おわりに

ささやかな研究であり，まだ研究半ばであって，好結果を期待するのは無理であるが，さらに生徒理解を深め，生徒がもっと意欲的な生活態度になるよう努力したい。またTKの子のこ，教科担任によっては，授業をまじめに受けない生徒のいることを考え，個別相談をさらに進めなければならないことを痛感するものである。